

めて來會せしめ、歌を賜ふて之を促し給ふ、曰く「何時までか我のみひとり住吉のとはぬ恨を君に残さん」然れども信濃の地早寒氷雪荐りに凝りて人馬通せず、軍を出すに由なく空して咨嗟するのみ親王御返し。

わか急く心を知らは住吉のまつ久しさを恨みざらん

文中三年親王御子尹良親王を信濃大河原に留め、自ら吉野に上り給ふ、吉野朝廷にては宗室元勳の歸來により俄に其寂寞を破れり、親王は名にし負ふ歌道の達人に坐せば、屢歌合等の會を催し、毎時其判者となりて一時の憂さをも忘れ給へり親王又夙に南朝義烈の人々の和歌を撰集し給はんの御志あり、此時も材料の蒐集に御力を盡し給ふ、かくて數年を過させ給ふ程に悲報は京都より來りぬ、御子興良親王病革りての消息なり、其末に「如何に尙涙をそへてわけわひん親に先立つ道芝の露」とありければ親王。

我こそは荒き風をも防ぎしに獨や苔の露拂はまし

此御返し京に達せし翌日御子は遂に空しく成給ひぬ、天授三年東國に歸り給はんとして果さず、大和長谷寺に入り先立し若宮の跡を弔ひ、深く悲傷に沈み給ひ遂に再ひ僧となる、此時一首の歌を後龜山天皇に奉らる。

君になど我をはつせの鐘の音かくなるとたに知らせさりけむ

同五年東國に下り、六年五月又吉野に上り、夫れより河内山田に閑居して新葉和歌集を撰ひ給ふ、此集は元弘より弘和の間南朝君臣の歌を編し北朝の人を探らず意を言外に寓せらる、天皇感賞して勅撰に准せらる、弘和元年訂正して奉り給ひぬ、時に御年七十。

弘和二年今一度南朝の御運を開き給はんと思はし立ち、先づ遠江國に赴き美濃尾張を經營して信濃の官軍と呼應し都に上らん事を謀り給ふ。

元中二年まで畫策怠るところ無かりけるか、事未だ緒に就かずして八月十日溘然として薨去し給ふ、御年七十三。

親王の第一子興良親王は、今川氏の爲に秋葉城に擒はれ給ひて、父親王に先づ事九年、天授三年北京にて幽囚の裡に薨せられ、第二子尹良親王は親王薨して十一年の後、應永三年信濃浪合にて逆徒のために戰歿せられ、御父子の熱血王事に灑ぎ盡して復餘瀝無し、陵畔の樹綠蔭深き處、今尙杜宇の血に啼く聲を聞き、引佐細江の波のよるゝ、凄凉たる月影の盡きぬ恨を語るを見る。

塔尾御陵は、遺詔により北面して帝畿を望み給へり、井伊谷御墓亦西面して帝畿に向へり、亦御遺旨によるなる無らんか。

嗚呼天潢分流金枝玉葉の御身を以て南船北馬五十年、中央に楠氏北畠氏等が正統天子を彈丸黒子の地に奉するに對し、西に懷良親王の征西府あり、東に親王の東國經略に任するありて、鼎立して以て南朝五十七年と相始終す、其志當時に伸ひずと雖も、而も其高風苦節は士氣を萬世の下に維持するに足り、其振起感發せるもの實に明治維新の鴻業の根基を成すに至れり、豈躋ならずや。

悲風慘雨五百年、英魂空しく邊僻の地に埋れ給ひて誰訪ふ人も無かりしに、天運巡環皇室隆興の機に會し、明治天皇御即位の始に仰出されあり、同二年本宮を造營せられ、同五年御鎮座あらせられ、同六年官幣中社に列せられ、永く國家の重祀に預らせ給ふそ宜なりける。御例祭は毎年九月二十二日なり。

攝社井伊社は本宮の南に在り、親王及御子尹良親王に忠事せる井伊道政其子高顯の二靈を祀る。

親王の御陵墓は、本宮の背後にあり、域内六百坪石垣を以て圍み、寶篋印塔の墓石西に向ひ給へり、南に門あり、宮内省の所管に屬し、守部日夕洒掃に従ふ。

大正九年一月

大正九年二月二十八日印刷

編輯者 山崎 常磐

大正九年二月二十九日發行

發行所 井伊谷宮社務所

印刷所 掛川活版所

静岡縣引佐郡井伊谷村井伊谷
静岡縣小笠郡掛川町五〇三番地

官幣中社井伊谷宮略記

History of Inoya-gu,
Fotomi prov.

官幣中社井伊谷宮御略記

静岡縣引佐郡井伊谷村鎮座官幣中社井伊谷宮御祭神は、後醍醐天皇の皇子宗良親王に坐します、當時鎌倉幕府の專横益々甚しく、御父天皇風に政權恢復の御志あり、思召すところありて、元徳二年親王御年十八の時妙法院に入らしめ、僧正と爲し御名を尊澄と申させ給ひ、次で天臺の座主と爲り給ふ。

元弘元年北條高時兵を擧げて禁闕を犯す、天皇之を避けて密かに奈良和束を経て笠置山に入り給ひ、花山院師賢に禿龍の御衣を着せ、乘輿に駕し陽りて天皇と稱し叡山に上らしむ、此時親王は尊雲法親王と共に延暦寺の僧徒を率ひ、賊將佐々木時信を幸崎濱に逆へ撃ち、奮戦して之を破り給ふ、是れ親王の御初陣にして御年甫めて十九なり。然るに心無き比叡の山風は輿簾を吹き翻し、山徒天皇の眞ならぬを知りて悉く散じ去りしかば、親王も亦潜行して石山を経て父帝の御許に笠置山に入り給ひ、城陷るに及び父帝を扶けて公卿數人と逃れ出て給ふ、千歳の下松の下露ならぬ血涙に臣民の袖を絞る彼の「さして行く笠置の山を出でしより天が下には隠れ家もなし」の悽慘なる御製ありしは、實に此時なり。

程もなく天皇は隱岐に遷幸あり、親王は讃岐諒間に流され給ふ、後十有五月にして賊臣高時誅に鎌倉に伏し、車駕京に還りて率土再び天日を仰ぐを得、親王も疾く四國より凱旋して戎衣を脱し復天臺に入り給へるに、延元元年足利尊氏叛し、尋て楠正成は湊川に戦死し、新田義貞は北國に下り、天皇は京師に幽せられ給ひ妖雲重ねて天日を蔽ひぬ、此時親王御年二十四、再び法衣を擲ち、井伊遠江介道政を随へて近江打出濱より船に乗り美濃路を経て尾張犬山に到り夫れより初めて遠江に入り、道政の領内井伊庄奥山城に入りて東國の經略に任し給ふ。

延元二年二月親王井伊城に在り、義兵を募る、今川氏の兵來り攻めて三方原に戦ひ、之を撃退す。

延元三年正月北畠顯家陸奥の大兵を率ひ來るに會し、共に西上し給ひたれども、顯家の軍利あらざりしかば、親王は伊勢伊賀を経て吉野に至り給ふ、同年秋聖旨を承け再び東國經略の重任に當り給ひ、義良親王は陸奥に、親王は遠江に、各其任地に赴かんとして、閏七月廿五日吉野を發し、八月十七日纔を伊勢國度會郡大湊に解く、海上暴風に遭ひて互に離散し、親王の御船は九月十一日夜遠江白羽湊に漂着す、(今の濱松市馬込川の下流)時に夜闇黒何れの地なるを知らず、將士終夜波に搖られ風雨に打たれ困憊を極む、親王御歌あり。

いかてはす物とも知らず苦やかたかたしく袖の夜の浦波

かくて親王は匹馬驛(今の濱松市)を経て、三方原に今川氏の兵を敗り、再び井伊城に入り給ふ、御詠あり。

なれにけり二度きても旅衣同じ東の峯のあらしに

親王は是より近國を跋涉して到る處に勤王の義徒を糾合し、其勢力は遠江を中心として、北は信濃、西は三河東は駿河に及び、東海の要衝を扼し、居然京鎌倉を中斷し威勢一時に振ひ給へり此の兵馬倥偬の際にありても、親王の錦心繡腸は常に臂中綽々として餘裕あるを示し給へり。

延元四年春頃、遠江國井伊城に住侍りしに、濱名の橋の霞わたりにて橋本の松

原湊の波かけて、はる／＼と見渡さる、朝夕のけしきおもしろく覺侍りしかは。

夕暮は湊もそこしらすけの入海かけてかすむ松原

はる／＼と朝みつしほの漣船こき出るかたは猶かすみつ、

尊氏、親王の勢力の漸次擴大せるを見て、大に怖れ。

延元四年七月高師泰足利高經仁木義長等をして、大軍を率ひて親王の根據地井伊谷を犯さしむ、師泰は湖東よりし、高經は湖西よりし、七月廿六日鴨江城を陥れ、十月三十日宇頭峰城(入出村にあり)を陥る、此頃親王三嶽山城にあり、天皇の此年八月十六日崩御し給へるを聞き悲傷に堪へ給はず、吉野の四條隆資が許へ、折節庭前の楓葉花よりも紅なるを一葉添へて。

思ふにもなほ色淺き紅葉かなそなたの山はいかしくくる、

と云ひやり給ひける、かゝる間にも猶親王は兵を勵まし城に嬰りて固守し、拒戦數閏月にして、興國元年正月三嶽城終に陥る、親王は更に殘卒を率ひて、大平城に入り給ひ、苦戦二百餘日大敵支へ難く、同年八月大平城(龜玉村大字大平)亦陥る、是に於て井伊の諸城悉く陥り、親王は一時其根據地を失ひて駿河に入り信濃に轉し、甲斐美濃越中越後上野の國々に往來し、流離竄匿備さに艱阻を極め給へり。正平七年新田義宗義興等親王を奉して尊氏を鎌倉に攻め破る、親王軍を武藏野に進め、英氣颯爽馬上歌ひ給はく。

君の爲世のため何か惜からんすて、甲斐ある命なりせば

悲壯激越全軍の意氣天を衝き、血戰十餘合殆ど賊魁尊氏を獲んとして能はず、次て笛吹嶺の戦に敗れて信濃に入り給ふ。

同年五月後村上天皇男山に幸し、東北の兵を召し給ふ、親王軍を出して美濃に至り男山陥ることを聞きて止め給ひぬ。

正平十年親王脇屋義治と共に、兵を上野越中越後及駿遠三に募り給ふ、時既に南風競はず應ずるもの少なし、正平十五年秋天皇住吉に幸し、親王に詔して兵を集